

イスラーム教徒の世界観—信仰・社会・政治



講師:池内 恵 氏(東京大学先端科学技術研究センター 准教授)

アルジェリアの事件の衝撃は、まだ記憶に新しい。危機管理対策レベルのみならず、イスラーム世界の思想・文化・慣習という根本的なレベルから、虚心坦懐に学ぶべき時期を迎えているのかもしれない。池内恵氏がイスラームの世界観、そしてイスラームの現在を語った。

イスラーム世界の根幹を成す 啓示と教典

イスラーム研究をしていると「なぜイスラームを?」という質問を必ず受ける。私が成人した1990年代前半は冷戦崩壊の転換期にあり、体制崩壊後の世界をどう見いだすかについて、「歴史の終焉」と「文明の衝突」という二つの相反する考えがあった。結果としてその後の世界は、文明圏の間にある種の「対立」があり、また他方で自由民主主義への収斂もある程度進んだ。両極で揺れる世界の中で最も興味深い研究対象、それがイスラーム世界であった。

では、そのイスラーム世界とはどのように生まれたものなのか。信仰・社会・政治の面で読み解きたい。

イスラーム教というと戒律のイメージが強いが、戒律の守り方は国、土地ごとに異なる部分もある。根底で共通しているのは、啓示に対する絶対的な確信だ。預言者に託された神の啓示を、いわば「物理法則」「歴史事実」ともいえる絶対的真理として彼らはとらえている。

それゆえイスラーム教は、「解答集」としての宗教といえる。仏教やキリスト教が、無理難題ともいえるテーマを提示し考えさせる「問題集」としての宗教であるのに対し、イスラームでは啓示の中に必ず答えがあり、啓示に基づき価値判断すれば、新しい事象もすべて

理解できるという考え方なのだ。

その啓示を示したものが啓典(コーラン)であり、啓示があることこそが宗教としての絶対要件と信じられている。

また、啓示を託された預言者はムハンマドが最後であり、それ以降に「預言者」を主張する者は絶対的に正しくないととらえる。それゆえ、教義上の異端や分派、路線闘争は生じにくい。

イスラームの最も根源にあるものは啓示であり、言い換えればそれは「法」である。コーラン、ハディース(ムハンマドの言行録)を基に、何が望ましいか、何をすべきではないかといった法的・倫理的規範を形成する。その点では、戒律の順守を厳しく求める律法主義のユダヤ教と近い性質を持つ。逆に、ユダヤ教の律法主義を批判して登場したキリスト教を信仰する人や、キリスト教文化に慣れ親しんだ日本人にとっては、なじみにくい感覚なのかもしれない。

思想的なバックボーンは 超国家の共同体・ウンマ

社会という点では、国家を超えるウンマ(宗教的共同体)が大きな意味を持つ。歴史上、政体としての一体性を持っていた期間は長くはないが、ウラマー(イスラーム法学者)を中核とする全世界的なつながりは今も存在する。ウラマーはイスラーム法の解釈を行い、法の判断を人々に示す存在であり、超

国家的に活動する。イスラーム世界の一体性を創出する、重要な存在となっている。

政治を見ると、イスラーム国家は初期の段階では政教一致の国だった。すなわち、宗教規範が政治規範だった。

そのため、「ムスリムが多数いる国は、イスラーム法が施行されなければならない」という原則があり、政治指導者にとっては義務となる。

例えばエジプトやトルコといった近代国家では、主権国家となるために世俗法を作らざるを得なかった。しかし家族法などは、イスラーム法にのっっている。二元的な法制度をとること自体はあまり問題視されないが、政府が国を支えられない、あるいは他の異教徒の国に従属したような状況になると、「ジハード」という強硬な考えも持ち上がってくる。

これがイスラーム世界の対立の図式である。原理主義的思想は、超国家のウンマを基盤としているため、イスラーム世界に共通して潜在しているといえる。今日においては特に、ネットや衛星テレビ等がウンマ共通の意識を助長させる手段となっている。

こうしたシステムがイスラーム社会には厳然と存在し、そのコミュニティに約16億人が所属している。日本がグローバルな展開を志向する以上、知っておかねばならない現実であろう。